

# 景観に配慮した開発説いたが



いわい・てるよし 1948年、相楽郡木津町(現・木津川市)生まれ。奈良県立大学商学部卒。1978年、「木津の文化財と緑を守る会」創設。木津川市文化財保護審議会審議員。

いま、JR木津駅の東側に目をやると何とも味気ない風景が目に入る。それは宅地開発で裾野を削られたモヒカン刈りの山と緑のない台地が広がるためだ。また恭仁京の中心軸の路が通ると考えられる釜ヶ谷(木津高校東側)も埋められ、

木津の文化財と緑を守る会会長

## 岩井 照芳②

歴史的景観も失われた。

この開発方法を知ったのは1978(昭和53)年、炭本喜尚・木津町教育長を訪れた時だ。木津は宅地開発行為で、自然景観や緑地がほとんど無くなると危惧され、将来を憂えられた。

私は奈良県風致保全課に在職した経験から、木津町の無謀と思える住宅開発計画に驚いた。奈良県は風致地区条例で景観を守っている。簡単にいえば開発する宅地を緑地で覆う方法だ。見える前面側は稜線まで自然緑地を残し、裏側を開発

すれば景観は保全できる。木津町の開発方法は、自然景観や緑地を守る配慮が乏しく、少しでも多くの宅地を供給する経済優先の方法が採られていた。

同じ頃、奈良県のJR平城山駅東側の佐保台の地は風致地区のため、開発申請が出された。県は木津町からも住宅が見えないように緑地で隠す方法を指導した。おかげで今も木津からは見えない。他県でさえ木津の景観のために配慮しているのに残念な話だ。

この経緯から会名に緑を加え、「木津の文化財と緑を守る会」として保全運動を始めた。町長に自然景観の重要性とともに、開発の方法論を何度も説いたが理解されなかった。「保全より開発が大事」の姿勢はその後も続いた。壊された自然景観は二度と元に戻らないのに。

四季  
つれづれ